

直観（ちよつかん）とは、知識の持ち主が熟知している知の領域で持つ、推論など論理操作を差し挟まない直接的かつ即時的な認識の形式である。また直観は、合理的かつ分析的な思考の結果に概念化された知識の実体が論理的に介入する（すなわち思考や、概念という仲介物が知識の持ち主と対象の間に論理的に置かれる）ようなすすべての知識の形式、とは異なっている。

パースの言うアブダクションという仮説形成の操作にも直観作業が用いられている、と考えられている。この場合、経験や知識と前提への理解が無意識に落とし

込められるほど強い場合、意識せずとも正しい認識に至ること。

アントニオ・ダマシオのソマティック・マーカー仮説において説明される、内臓感覚としての情報の展開・操作・認識も直観の一部と言える。直観は本能とは異なっている。本能は必ずしも経験的な要素を必要としない。直観的な基礎による見解を持つ人間は、その見解に至った理由を即座に完全には説明できないかもしれない。しかしながら、人間は時間をかければ、その直観が有効である理由をより組織化して説明するべく論理の繋がりを構築することで、直観を合理的に